

平成30年度 第1回 第1学年 SGH 講演会

〈目的〉

フィリピンで国際支援活動を行っている方から直接話を聞くことで、フィリピンやNGO 団体支援活動についての理解を深める。

現代の世界で起こっている諸問題に関心を向けることを通じて国際社会に対する視野を広げる。

〈対象〉 平成30年度第1学年（133期生）全生徒

〈実施日〉 平成31年 1月11日（金）第3限

〈実施場所〉 本校多目的ホール

〈講師〉 松隈 信一郎

一般社団法人ストレングス協会 代表理事、慶應義塾大学大学院医学研究科、
フィリピン NGO 団体 Dynamic Teen Company 所属

〈内容〉

松隈氏作成のパワーポイントによって、生徒達は実際のニュースを見たり記事を読んだり、当事者達の実際の声を聴いたりしながら、多くのことを学んだ。博多弁で熱く語る松隈氏の情熱に、多くの生徒は心を動かされたようだ。講演の構成とその要旨は次の通り。

1. フィリピンの NGO 団体に関わることになったわけ

大学生の時にたまたまテレビで、CNN Heroes に選ばれた Efren Penaflorida Jr.を観たことが人生の大きな転機となり、そのままフィリピンに飛び込み、Efren の手伝いをする事となった。

2. フィリピンでの活動を通して学んだこと

しんどい状況に置かれながらも明るく力強く生きている子供達の姿を目の当たりにして、One is never too poor to help others. (人助けをするのに貧しすぎることはない)、One is never too young to make a difference. (違いを生じさせるのに若すぎることはない。若くても重要なことができる。) ということを実感した。

3. 日本での活動

東日本大震災の知らせを受けるとすぐに日本に戻り、日本での活動を精力的に行った。そこで気がついたことは、フィリピンよりも恵まれているはずの日本で、若者の高い自殺率や引きこもりなど、子供たちに関わる問題が多数あるということだった。

4. ポジティブ・サイコロジー

日本が抱えるこのような問題に対して、従来の心理学（「弱み」を直し、克服する方

法)とは異なるアプローチの仕方である、ポジティブ・サイコロジー(「強み」を活かす方法)が有効であると考えた。そしてこの考え方は、世界の貧困問題にも対処できることを知った。

5. 現在の活動

一般社団法人ストレングス協会の代表理事として、日本やフィリピンなどで「強み」の研究と実践を行っている。また、ポジティブ・サイコロジーを応用した不登校支援の拠点を東京に置き、日本中で様々な支援活動を行っている。

6. 生徒へのメッセージ

どんなことでもいいから、行動を起こそう。When you pray, move your feet. (祈る気持ちがあるのなら、自分の足を動かそう)

〈成果〉

講演を聴いた1年生全員を対象に、同日以下のような質問項目のアンケートを実施した。

①この講演会に参加して、何か気づいた(発見した)ことがありましたか?

4 おおいにある 3 まあまあある 2 あまりない 1 全然ない

	4	3	2	1
人数	139	149	10	2
%	46.3	49.7	3.3	0.7

②この講演会に参加して、これからの生活で何か変わりそうなことがありますか?

4 おおいにある 3 まあまあある 2 あまりない 1 全然ない

	4	3	2	1
人数	79	178	34	9
%	26.3	59.3	11.3	3

以下は、自由記述欄から抜粋したものである。

- ・思っているだけでは何も変わらなくて、実際に行動してみることだけが問題を解決することにつながるとわかった。
- ・私自身、テレビや本などで自分の心を強く動かされるような話を見聞きしたことは何度かあった。しかし、自分で聞いて自分の心の中に閉まっておくだけで、何か行動するということはなかったように思う。講演を聞き、この先の一步が重要なのだと感じた。自分から行動を起こすことで、何か変化や発見があると思った。
- ・行動する前から「できそう」とか「できなさそう」とか決めつけてかかるのではなく、自分は絶対できると思ってやるべきだと気づかされた。
- ・北野に来てから、自分の他の人と比べて負けているところばかり考えて克服しようと思っていたが、自分の良さを見つめることの方が大事だと思った。

- ・ 10代の死亡理由に自殺が多いのは、日本がトップだと知って、物の豊かさと心の豊かさは比例しないのだと思った。
- ・ 「パグパグ」という料理の動画は衝撃だった。（注：パグパグ＝残飯として捨てられた生ごみを再調理して食べること）
- ・ 知っているのと見る（聞く）のは違うと思った。
- ・ お金が十分でない小さな子供でも、行動することによって、可能性は無限にある、ということに気がついた。何かいいことが思いついても、行動しなきゃ一緒だし、もっと人生を柔軟に笑顔で生きていくべきだと思った。
- ・ 自分も人のためになってやりがいのある仕事に尽きたいという気持ちが大きくなったので、自分が打ち込めるものを見つけるためにいろいろなものに触れて世界を広げたいと思った。
- ・ 何だってできると思えば部活も勉強ももっともっと頑張れるはずだから頑張ろうと思った。
- ・ 今まで何かやる際、失敗したらどうしようと結果ばかりを考え、一步を踏み出せてなかった気がする。これから失敗を恐れず、何事にもチャレンジしようと思った。
- ・ 普段の生活から、自分の悪いところばかりにフォーカスするのではなく、自分の良いところを見つけ、そこを伸ばしていく方が良いと感じた。今まで悪いところばかり見ていたが、変えていこうと思った。
- ・ 講演前よりも自信を持って学校生活できそう。自分が今勉強できるのは幸せだと感じてフィリピンの人に負けずに努力しようと思った。
- ・ 目の前のテストの点数も大事だけれど、そんなことよりも世界のことに目を向けることで、自分の見方も変わるのでは、と感じた。自分の恵まれている環境を痛感し、またそれを他の人のために使っていかねばならないと思った。
- ・ 自分の目・耳などに飛び込んでくる全ての情報に意識を向けるようになると思う。会社を立ち上げたいと明確に思うようになった。
- ・ 学生の頃からスラムやゴミ山に出向いている人やプレゼントをするプロジェクトを始めた子がいて、決して裕福ではないけれど（だからこそ？）同じような状況の子供に対して何かしようという意識を感じた。日本人の大半は、どうしても「してあげる」というのが出てしまうので、その意識をなくしていきたい。
- ・ 「貧しい人だから」ではなく「隣の人を助ける」というところに感動した。
- ・ 日本から出てみたいという気持ちができる。

平成30年度 第2回 第1学年 SGH 講演会

〈目的〉

現在研究生活を送っている大学院生による自身の体験を交えた講演を聴くことによって、1年生が研究テーマの決め方、調査・研究方法の探し方、論文の書き方などについての基礎的事項を学習し、次年度に取り組む課題研究に向けての動機づけとする。

〈対象〉 平成30年度第1学年（133期生）全生徒320名

〈実施日〉 平成31年 2月 1日（金）第3限

〈内容〉

本校多目的ホールにおいて、上記目的のもとに講演を行った。

講師は京都大学大学院文学研究科地理学専修博士課程大学院生、谷本涼さん。本校の卒業生（123期生）である。「研究・探究のキーポイント」と題して、研究や探究活動のごく基本的・常識的な部分、特にテーマ選定に関する部分を、ご自身の経験を例に具体的に説明していただいた。以下に講演内容の構成およびその要旨を示す。

1. 研究ってなんだ

研究とは、全人類の知をほんの少しずつ広げる営為であると言える。

研究者は、最終的に論文の執筆をめざすことによってその営為に寄与する。

高校生のみんなが課題研究でとりあえずめざすもの～「研究」の一步手前の「探究」

世界は何を知っているか？何をやれば社会に貢献できるか？を探る練習。

成果物の完成度が全てではない。

2. 研究論文を仕上げるまで ～研究の構成要素

（前段階）スケジュールを立てる

期間は1年～大学生の卒業論文と同じ。1か月単位で計画を立てる。

（1）目的と研究史 ～テーマをアピールする

理想的な研究の目的（問い）が備えることが望ましい3つの要素

- ・おもしろい問い ～自分の興味・関心
- ・やくにたつ問い ～社会的貢献
- ・されていない問い～学術的意義 →高校生には難しいかもしれない。

ここで、谷本さん自身の経験、公共交通・都市政策への関心から現在の研究テーマに関するキーワード：アクセシビリティに至るまでの経緯を具体的に話していただいた。

（2）方法

再現可能性が重要であること、アンケートという方法は実は大変であることなどに言及された。

（3）結果 ～論文の華

図表をうまく使うことをアドバイスされた。

(4) 考察・結論

研究の目的と対応した形で記述することを強調するとともに、研究を進めていく中で研究者自身の問題意識が変化し、テーマが変化することもあると指摘された。

(仕上げ) お作法

論文作成に関する「お作法」についても簡単にふれ、約45分間の講演が終了した。

〈成果〉

講演を聴いた1年生全員を対象に、同日以下のような質問項目のアンケートを実施した。

①この講演会に参加して、探究活動を行う上で参考になることができましたか？

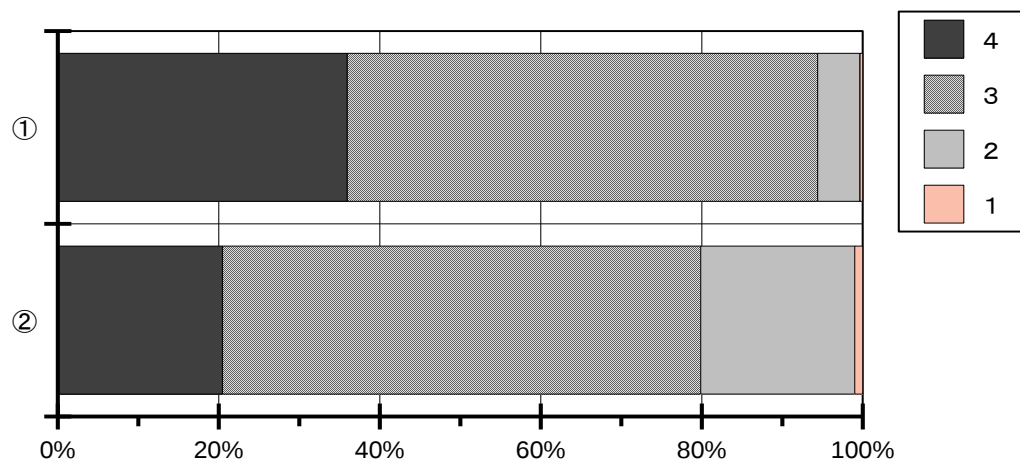
4 おおいにある 3 まあまあある 2 あまりない 1 全然ない

②この講演会に参加して、次年度の課題研究でのテーマ選びに参考になりましたか？

4 参考になった 3 まあまあなった 2 あまりならない 1 全然ならない

設問①については自由に記述してもらった欄を、設問②については「課題研究でこんなことをやってみたい」というテーマを書いてみてください、という項目を設けた。

番号で回答する設問の集計結果は以下の通りであった。



以下は、設問①の自由記述欄から抜粋したものである。

- ・全人類の知識を少しだけでも広げる、というのがとてもわかりやすく、今までやっていた調べ学習とは違うということがよくわかった。
- ・理系、文系に共通することが多いと思った。手順が大事であると思った。
- ・自分にとっておもしろい問いで、社会にとって役に立つ、できれば今までにされていない問いとなるテーマを見つけたいと思った。また、スケジュールをきちんと把握しなければならないなど、たくさんすることがあり、来年の課題研究を行う際の参考になった。
- ・研究といわれるとぼんやりとしかイメージが分らなかったが、どういう気持ちで挑めばいいとか、何をめざせばいいかが少し理解できた気がする。

高校1年生にとっては難しいと思われる内容であったため、番号での回答で”3”が最も多数を占めている状況は理解できる。しかし、これは2年次において実際に課題研究の取組を進めていく段階で必要になる内容でもある。また、”2”と回答した生徒の自由記述に以下のようなコメントがあったことは注目に値する。

- ・パワーポイント上の文章が多すぎてトークに集中できなかった。知っていることが多かった。
- ・自分の興味のあることをいろいろな段階を踏んで探究することがおもしろいし、自分の能力の向上にもつながると思った。

講演を聴いた教員からは「パワーポイントのデータを提供してほしい」という要望が出され、講演者の了解を得てコピーを入手することができた。

最後に、後輩たちのために労を惜しまず協力していただいた講演者の谷本涼さんに心から感謝申し上げます。

